

【論文】

宮沢賢治文学における地学的想像力（五）

―応用編・修羅意識と中生代白亜紀―

鈴木 健 司

本稿は「宮沢賢治文学における地学的想像力」というテーマの下に企図された、連作論文の一つである。これまで、（一）「基礎編・珪化木（Ⅰ）及び瑪瑙」「文学部紀要」文教大学文学部第21、2号）、（二）「基礎編・珪化木（Ⅱ）」「言語文化」第20号、文教大学言語文化研究所）、（三）「基礎編・（まごい洲）と（豊沢川の石）」（注文の多い土佐料理店」第12号、高知大学宮沢賢治研究会）、（四）「応用編・榎ノ木大学士と蛋白石、発展編・ジャータカと地学」「文学部紀要」文教大学文学部第22、1号）として、発表している。本稿は、賢治の修羅意識と中生代白亜紀との関わりに注目し、中生代白亜紀の時空間（修羅性）への恐怖と、救済としての「透明な人類」について考察する。

なお、詩集『春と修羅』所収の詩の引用の表記だが、促音に関し「っ」でなく「つ」と大きく印字されており、『新校本全集』表記もそれにしたがっている。本稿での引用も大きな「つ」とする。賢治の場合、原稿状態では小さな「っ」を用いることが普通である。

キーワード：修羅、白亜紀、恐竜、榎ノ木大学士の野宿、透明な人類

一、白亜紀の巨きな爬虫類

「榎ノ木大学士の野宿」の「第三夜」は、第一夜、二夜とは異なり、海辺が舞台である。

榎ノ木大学士は、海に面した浜辺の崖に、波で削られ

たらしい洞を見つける。

「斯う納まつて見ると、我輩もさながら、洞熊か、洞窟住人だ。ところでもう寝よう。

闇の向ふで

涛がぼとぼと鳴るばかり

鳥も啼かなきや

洞をのぞきに人も来ず、と。ふん、斯んなあんな

ばいか。寝ろ、寝ろ。」

大学士はすぐとるところする

疲れて睡れば夢も見ない

いつかすっかり夜が明けて

昨夜の続きの頁岩が

青白くぼんやり光つてゐた。

大学士はまるでびっくりして

急いで洞を飛び出した。

あわてて帽子を落しさうになり

それを押へさへもした。

「すっかり寝過ぎしちゃった。ところでおれは一体何のために歩いてゐたんだったかな。えゝ

と、よく思ひ出せないぞ。たしかに昨日も一日も人の居ない処をせつせと歩いてゐたんだが。いや、もつと前から歩いてゐたぞ。もう一年も歩いてゐるぞ。その目的はと、はてな、忘れたぞ。こいつはいけない。目的がなくて学者が旅行をするといふことはない、必ず目的があるのだ。化石ぢやなかったかな。えゝと、どうか第三紀の人類に就いてお調べを願ひます、と誰か云ったやうだ。いや、さうぢやない、白堊紀の巨きな爬虫類の骨格を博物館の方から頼まれてあるんですがいかゞでございませう、一つお探しを願はれますまいかと、斯うぢやなかったかな。斯うだ、斯うだ、ちがひない。さあ、ところでこゝは白堊系の頁岩だ。もうこゝでおれは探し出すつもりだったんだ。なるほど、はじめてはつきりしたぞ。さあ探せ、恐竜の骨格だ。恐竜の骨格だ。」

ここでの榎ノ木大学士は、「極上等の蛋白石」を採取するという当初の目的をすっかり忘れ、《第三紀の

人類についての調査」か「白亜紀の巨きな爬虫類の骨格の採取」かと思ひ違いをする、いい加減な性格の持ち主として提示されている。結局は、「さあ、ところでこゝは白堊系の頁岩だ。もうこゝでおれは探し出すつもりだったんだ。なるほど、はじめてはつきりしたぞ。さあ探せ、恐竜の骨格だ。恐竜の骨格だ」となるが、おそらく、恐竜のテーマは作品構造の最初から用意されていたもので、賢治にとつての恐竜のテーマは、基本的には切実な問題であつたと推定される。恐竜の夢に関し、類似の内容のものが森荘巳池の聞き書きとして残されているので、確認しておきたい。

歩いているうちに、あたりはやや傾斜して、小さな松の木が生えているような場所にかかった。私達は松の木をさがして、その下に眠ることになった。大地は暖かつたが、岩手山から降りてくるその空気はつめたく、どうしても深く眠ることができず、うつらうつらとしていた。ああむいて寝ると、腹の方がつめたく、うつむいて寝ると、背の方が寒いのであつた。

《こくらに眠ると、いつでも大きな亀のような爬虫類が、お前を食べるといったり、お前の血がほしい、おまえの血がほしい……と、どんだんおしにかけてきましてね……》

二人同時に、一本ずつとなり合つた松の根元から立ちあがつて夜の底をまた歩き出したとき、宮沢さんが、今しがたうつらうつらして見た恐ろしい夢を話した。夜中にこの道に來ると、ここで野宿をしなくても必ずよくない幻想に襲われるともいった。

（「『春谷暁臥』」の書かれた日」昭9・1、
『宮沢賢治の肖像』津軽書房所収、昭49・10）

場所は、岩手山麓の姥屋敷の付近のことだつたという。姥屋敷の少し先は小岩井農場である。詩「小岩井農場」の「パート四」に記された次の詩句は、賢治が森荘巳池に語つた「大きな亀のような爬虫類」の夢と通底するものと考えてよいだろう。

いま日を横ぎる黒雲は

侏羅や白堊のまつくらの森林のなか

爬虫がけはしく歯を鳴らして飛ぶ

その氾濫の水けむりからのぼつたのだ

たれも見えていないその地質時代の林の底を

水は濁つてどんどんながれた

となれば、賢治が夢に見たものが、地質学でいう中生代の〈侏羅紀〉や〈白亜紀〉のイメージと関わっており、当時の大型爬虫類としての「恐竜」の存在は、賢治の無意識の中に、重い意味をもつて存在していたのではないかという推定が可能となる。その無意識のひとつの顕現が「樫ノ木大学士の野宿」の第三夜の恐竜の夢ではないか、というのが本稿における私の仮説である。

「おや出たぞ。」

樫ノ木大学士が叫び出した。

その灰いろの頁岩の

たいらな奇麗な層面に

直径が一米ばかりある

五本指の足あとが

深く喰ひ込んでならんでゐる。

所々上の岩のために

かくれてゐるが足裏の

皺まではつきりわかるのだ。

「さあ、見附けたぞ、この足跡の尽きた所には、きつとこいつが倒れたまゝ化石してゐる。巨きな骨だぞ。まづ背骨なら二十米はあるだらう。巨きなものだぞ。」

大学士はまるで雀躍して

その足あとをつけて行く。

「五本指の足あと」という表記から、この恐竜が〈竜脚類〉に分類されるものであることを、樫ノ木大学士が理解していたことを示している。横山又次郎著『古生物学綱要』（早稲田大学出版部・大9・7）の、〈竜脚類〉に分類されるプロントサウルス（雷竜）の骨格図を見ても、五本の指が確認できる。古来竜の指は五本と想像されていることからの命名だろう。もしこれが〈直脚類〉のイグアノドンや〈獣脚類〉のメ

ガロサウルスのような恐竜の場合ならば、後脚の指の数が三本であったことが骨格図から確認できる。〈直脚類〉〈獣脚類〉は二脚歩行であり、そのため、足跡の指の数は必ず三本になる（手の指は五本である）。

また、「きっとこいつが倒れたまゝ化石してゐる」という表現からは、榎ノ木大学士の認識が、この段階ではいまだ、現代空間・現代時間にあつたことが読み取れる。榎ノ木大学士の目の前にある足跡は、あくまで、化石としての足跡だからである。

しかし、物語の時空間は、次第に、中生代・白亜紀に変質していくことになる。

どうもをかしいと思ひながら

ふと気がついて立ちどまつたら

なんだか足が柔らかな

泥に吸はれてゐるやうだ。

堅い頁岩の筈だつたと思つて

榎ノ木大学士はうしろを向いた。

そしたら全く愕いた。

さつきから一心に跡けて来た

巨きな、臺の形の足あととはなるほどずうっと大学士の足もとまでつづいてゐて

それから先ももつと続くらしかつたが
も一つ、どうだ、大学士の
銀座でこさへた長靴の
あともぞろつとついてゐた。

そうして発見したのは、恐竜の骨（化石）ではなく、
生きた「雷竜」の群れであつた。

青ぞらの下、向ふの泥の浜の上に

その足跡の持ち主の

途方もない途方もない雷竜氏が

いやに細長い頸をのぼし

汀の水を呑んでゐる。

長さ十間、ざらざらの、

鼠いろの皮の雷竜が

短い太い足をちぢめ

厭らしい長い頸をのたのたさせ

小さな赤い眼を光らせ

チエウチエウ水を呑んでゐる。

あまりのことに櫛ノ木大学士は

頭がしいんとなつてしまった。

「一体これはどうしたのだ。中生代に来てしまったのか。中生代がこっちの方へやって来たのか。ああ、どっちでもおんなじことだ。とにかくあすこに雷竜が居て、こっちさへ見ればかけて来る。大学士も魚も同じことだ。見るなよ、見るなよ。僕はいま、ごくこつそりと戻るから。どうかしばらく、こっちを向いちゃいけないよ。」

賢治は「雷竜」を肉食と理解していたようである。「大学士も魚も同じこと」とは肉食を前提してはじめて意味が成立する表現だろう。『古生物学綱要』（前出）では、〈龍脚類〉や〈直脚類〉が菜食で、〈獸脚類〉が肉食であると記されている。なぜ賢治は「雷竜」を肉食と勘違いしていたのか。単なる勘違いと解するなら、鱗竜類に属する首長竜のような水生爬虫類が魚食性であったことと関わっているかもしれない。賢治

が作品を書いた大正一〇年代は、まだ、恐竜類の化石も鱗竜類の化石も日本では発見されておらず、賢治の中で知識の混乱ということがあつて当然かもしれない。また、夢の中の話なので、必ずしも当時の科学と一致しなくてはならないということもないだろう。重要なことは、賢治の無意識部に中生代大型爬虫類への恐怖・不安のようなものが存在し、そのような恐怖・不安を、賢治が思想上どのように取り扱い、テキストに位置づけようとしていたかである。

さて、中生代大型爬虫類に関し、賢治の想像力を喚起した元イメージのようなものがあつたはずである。調査した範囲で分かったことを提示しておきたい。

イメージの元としては教科書類の可能性が高いと考えられるだろう。すでに紹介した『古生物学綱要』もその一つといえる。著者の横山又次郎(1860-1942)は、日本地質学の開祖と呼ばれ、東京帝国大学教授であつた。明治末から大正期に多くの学術書・教科書を著している。私が直接確認したものは『古生物学綱要』（早稲田大学出版部・大9・7）、『前世界史』（早稲田大学出版部・大7・1）、『普通地質学講義』（富

山房 大6・1）、『古生物学』（富山房、明40・10）である。

賢治が第三夜の夢の中で見た雷竜に関する記述は、明治四十年の『古生物学』の段階から、確認することができる。恐竜類（目）、竜足類（亜目）、戴竜竜科として分類され、簡略ではあるが次のように記されている。

雷竜 Brontosaurus (第三百十五図) 前属ト同所
同系ニ産スルモノニシテ、頭ハ甚タ小ナルモ両肢
ハ強大ニシテ、薦骨ハ五椎ヨリ成レリ、体ノ長サ
約五丈三尺アリ (図1)

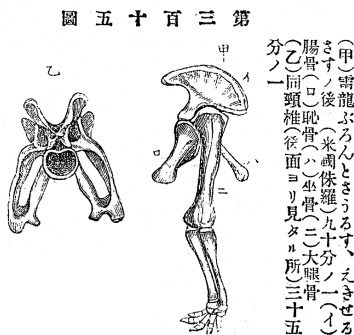
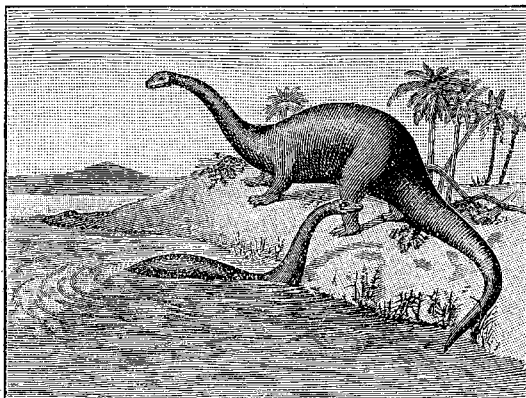


図1 『古生物学』第三百十五図

圖九十六百三第



(尺五十五長身) スサルセタゴ・スルウサトシロブ

図2 『前世界史』第百六十九図

ブロントサウルス・エクセルサス

図1からもわかるように、『古生物学』には、雷竜の全体骨格図や全体復元図がなく、この書から雷竜をイメージすることは難しいように思う。

その点、大正七年刊の『前世界史』では、「雷竜の如きは身の長約十六七メートルに及び」と記述された上で、復元図まで示されている。（図2）

この図で特に注目されるのは、二匹の雷竜のうちの一匹が水中にいる点である。立っているのか、泳いでいるのか判断をつけかねるが、テキストの「水の中でも黒い白鳥のやうに／頭をもたげて泳いだり」の箇所と重なる絵柄である点、賢治が見た可能性を示している。

また、大正九年刊『古生物学綱要』の表紙絵（図3）には、雷竜（プロントサウルス）ではないが、雷竜と同じ（龍脚類）である梁竜（ディプロドクス）が描かれており、本を手にした者に強烈な印象を与えるといつてよい。作品に描かれている湖沼のような場所で「いやに細長い頸をのぼし／汀の水を呑んである」ような絵柄も、第三夜の夢に描かれた雷竜の表現に繋がっていくといえるだろう。



図3 『古生物学綱要』表紙絵

表紙絵に付された「ディプロドクス／身長八十尺の怪物」との説明書きも印象的である。『古生物学綱要』には『古生物学』とちがいで、資料としてかなり多くの恐竜の骨格図が収められている。とはいえ、復元図とといったものは収められておらず、生きた恐竜の姿をイメージさせる唯一の箇所が、この表紙絵である。

それにしても、賢治の恐竜のイメージには蛇のイメージが絡み付いているようだ。テキストに見える「蛇に似たその頭」の表現は、実際に見たことのない恐竜

をイメージするための当然の比喩といえるかもしれないが、「小さな赤い眼を光らせる」とか「黒い舌を出して／びちよびちよ水を呑んでゐる」などの表現は、菜食の爬虫類にふさわしくなく、基本的には蛇のイメージを優先させた表現ではないだろうか。詩「青森挽歌」（『春と修羅』第一集）には「ナーガラがね眼をじつとこんなに赤くして／だんだん環をちひさくしたよ こんなに」の表現が見られる。

原子朗著『新宮沢賢治語彙辞典』の「ナーガラ」の項では、先の詩句を「妹の化身である蛙（ギル）をしめ殺そうとする蛇の名」と解釈し、「賢治は自己の修羅意識をしばしば蛇に、それからの超克を飛翔する龍にたとえた」と記している。蛇の眼は普通「赤」くなく、賢治の心理の投影と解釈すべきと考える。恐竜の目が「赤」いのも、蛇の眼を「赤」でイメージするその延長だと判断されよう。雷竜が菜食類であるのに肉食類として描いた背景には、おそらく蛇の肉食性が絡んでいると私は推定している。

原（前出）は、蛇と賢治の修羅意識の関連、そしてそれからの超克について指摘していたが、樋ノ木大学

士の野宿の第三夜での恐竜の夢もまた、賢治の修羅意識を考察する材料となるはずである。その点に關しては次章でさらに深めるとし、ここでは、樋ノ木大学士がどのように雷竜から逃れたのか、そこにも賢治の地質学的想像力を見て取れるので、考察しておきたい。

「もういけない。すっかりうまくやられちゃった。いよいよおれも食はれるだけだ。大学士の号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい。前にも居るしうしろにも居る。まあたゞ一つたよりになるのはこの岬の上だけだ。そこに登っておれは助かるか助からないか、事によつたら新生代の沖積世が急いで助けに来るかも知れない。さあ、もううったこの岬だけだぞ。」

学士はそつと岬にのぼる。

まるで蕁とあすなろとの合の子みたいな変な木が崖にもじやもじや生えてゐた。

そして本当に幸なことはそこには雷竜が居なかった。

すっかり雷竜に囲まれてしまった樗ノ木大学士は、「たゞ一つたよりになるのはこの岬の上だけだ」と語っている。「岬の上」のような高い場所がより安全であることは常識的に納得できることである。しかし、「岬の上」の安全性は、その〈高さ〉のみにあるのではない。地層の〈厚み〉にあるのである。「事によつたら新生代の沖積世が急いで助けに来るかも知れない」という表現は、「岬の上」の地層が新生代「沖積世」のものであったなら、つまり、現代の地層であったなら、中生代の生き物である雷竜はそこでは存在できないことになるからである。つまり、崖を這い登るとは、時間を遡るといふ行為なのだ。樗ノ木大学士は、中生代から現代までおよそ一億年を這い登らうと必死だったのである。

「岬の上」が、果たして新生代・沖積世の地層であったかどうか。「たうたう来たぞ、喰はれるぞ」「まつ黒な雷竜の顔が／すぐ眼の前までにゆうと突き出され」とあるので、文脈的には、樗ノ木大学士は雷竜に喰われてしまった可能性が高い。結末がいわゆる夢

オチなのではつきりしたことはないにしても、私は、「岬の上」まで登つたにもかかわらず、樗ノ木大学士に「沖積世」は助けに来てくれなかったと推定している。それはなぜか。岩手県で確認できる中生代白亜紀の地層は、三陸海岸にわずかばかり点在する宮古層群と呼ばれる地層だけであり、その宮古層群は地殻変動の結果、太平洋側に数十度傾斜（場所によつて傾斜角度は異なる）している事実と関わりがあるかもしれないと考えているからだ。（写真１）

写真１のように地層面が傾斜していたとするならば、「岬の上」の登つたからといって、そこが最も新しい地層とは限らないことになる。また、傾斜した宮古層群の上に新生代の地層が、水平（不整合）に積み重なっているという事実もない。つまり、樗ノ木大学士にとつて新生代・沖積世にたどり着く可能性はなかったのである。

したがって、賢治にとつての中生代白亜紀の悪夢は、無意識下において永遠に続いていると推定され、その不安・恐怖が、賢治をして「透明な人類」の存在証明へと、駆り立たせるのである。

二、透明な人類

小野隆祥「宮沢賢治作品の心理学的研究」（「啄木と賢治」第10号、みちのく芸術社、昭52・10）は、賢治作品における中生代白亜紀の問題を、文学的・心理学的視点から鋭くとらえた論考である。「（4）白堊紀幻想と遠祖ドリオヒテクス」から引用する。

賢治の白堊紀に寄せる想いは、単に地質学的関心とか人類先史への関心にとどまるのではなかった。それは個体賢治の過去および未来の問題と感ぜられていた。宗左近が指摘した「一種、非人称的な生きものになることへのおそれと願いが同時にある」（国文学五〇年四月号、宗左近・天沢退二郎対談）と見るべきである。賢治の白堊系頁岩に対する異常な関心は、輪廻転生（畜生へ落ちること）の恐怖と切り離すことができないと思う。

するどい見解である。私の研究は、小野の提起した

問題とその考察から多くの示唆を受けている。ただ、小野の研究にも検証・訂正を必要とするところがないわけではない。非力を承知で試みることにする。以下も小野論（前出）からの引用である。

弘前大学の宮城一男は、その好著「農民の地学者 宮沢賢治」で「樺ノ大学士の野宿」第三夜の場所は、多分陸中海岸のどこかの洞窟だろうとして以下のように述べる（同書一九七頁）。

また「第三紀の人類」ということだが、ここでもまた出てくるのが注目されます。”ここでも“といったのは、ほかの作品にも、賢治が人類は第三紀時代にすでに、地上に住んでいたというふうに考えていたと思われることだが、しばしばでてきているからです。人類は第四紀にはいつて、はじめて地球上に姿をあらわした—という一般的な考え方からすると、上記の考えは奇異に感じられますが、一方、こんにち、ヒトと類人猿の共通

の先祖である「ドリオピテクス」までさかのぼると、それはすでに、新第三紀中新世に誕生していたと信じられていますから、賢治の考えも、あながち不合理でなかったともいえるでしょう。

これは賢治の「第三紀の人類」の想像を弁護する好意的解説であるが、「一方、こんにち」と賢治時代の知見と今日のそれとを対比させたのは、いささか人を誤解させるおそれがある。なぜかならばドリオピテクス（ギリシヤ語でドリオは森、森のヒトの意味で命名）の発見は一八五六年で、賢治の作品から七〇年も前のことであつた。まず下顎骨がフランスで発見され、以後アジア、アフリカで多くの亜属が発見された。そして賢治の時代を考えれば、ワイトネルの系統樹やシュワルペのそれに中新世のドリオピテクスがチンパンジーと人類との祖先として位置づけられていた。賢治は根拠があつて白堊系の頁岩に遠い友だちの足跡を求めたと見る方がよいであろう。

ここで小野は、「第三紀の人類」（ドリオピテクス）に関し、地質学者・宮城一男の説に疑問を呈しているわけだが、「第三紀の人類」の箇所をテキストで確認しておく。

「目的がなくて学者が旅行をするといふことはない、必ず目的があるのだ。化石ちゃんかったかな。えゝと、どうか第三紀の人類に就いてお調べを願ひます、と、誰か云つたやうだ。いゝや、さうぢやない、白堊紀の巨きな爬虫類の骨骼を博物館の方から頼まれてあるんですがいかゞでございます、一つお探しを願はれますまいかと、斯うぢやなかったかな。斯うだ、斯うだ、ちがひない。」

小野は「第三紀の人類」の問題を、人類の祖先の問題としてとらえているという点では、宮城と立場は同じである。その意味で、ドリオピテクスに関していえば、やはり、小野の指摘していることは正しく、宮城

の説は訂正を要することになるだろう。

ただ一方、すでに紹介した横山又次郎著『古生物学』（明40・10）の「脊椎動物 哺乳類」の節では、「第三紀の人類」の存在自体の可能性を否定しておらず、まさに、「第三紀」に存在していた「人類」を楯ノ木大学士が脳裏に浮かべていた可能性も残されている。

洪積世ヲ去リテ、現世界ニ入レバ、哺乳類ハ全体ヨリ謂ヘバ稍々衰退ノ兆ヲ現スモ、カツテ微々タリシ、人類ハ其ノ数ノ増加ト其ノ知識ノ発達トニ因リ、漸次其ノ勢力ヲ増シ、遂ニ萬物ノ靈トシテ、他ノ哺乳類ヲ压倒スルニ至レリ

ココニ世人ノ尤モ知ラント欲スル所ノモノハ、蓋シ洪積世産ノ人類ハ、進化論ノ通則ニ從ヒ、人類中最下等ニ列スベキ者ナルヤ否ヤノ問題ナラン、是ハカツテ欧州人類学者中、熱心ニ研究セラレタル所ニシテ、一時ハ議論頗ル喧シカリシモ、結局欧州ニ産シタル洪積人ハ、其ノ文明ノ程度コソ卑ケレ、其骨骸ニ於テハ、毫モ現今ノ欧州人ト異ナル所ナキコト判然セリ、是ニ由テ觀ルトキハ、

人類ノ起原ハ蓋シ洪積世ニ在ラズシテ、悠ニ其以前ニ遡ルモノナルベシ、但シ吾人ハ未ダ其ノ確實ナル・証拠ヲ發見スル能ハザルナリ

横山又次郎の説は、（人類の起源は第三紀に遡ると考えた方が自然である。ただし、まだ確実な証拠を發見していない。）ということになる。この自説は、『古生物学綱要』（大9・7）になると見出すことはできず、学会主流の第四紀洪積世説に立つことになる。横山の「第三紀人類」説が、『古生物学』が發行された明治40年からの程度の期間主張されていたか不明で、おそらく、賢治の盛岡高等農林に在籍していた大正期には「第三紀人類」説は振るわなくなっていたと推定される。

ただ、国立科学博物館の図書館所蔵の『古生物学』（明43・1、再販）を調べてみたところ、偶然に、「大正三年四月」に「総会の折、博多にて求む」とのペンでの書き込みを見出し、この書物が大正三年当時でも権威あるものとして流通していた可能性が残されることになった。大正一二年頃という作品成立期から推定

すれば、賢治が『古生物学綱要』（大9・7）を無視して『古生物学』での人類起源説を信じていたとは考えにくいが、「第三紀人類」起源説自体の存在を知識としては持っていたのではないだろうか。

このような前提に立った場合、作品構造として、もし「第三紀」から「人類」の化石を発見したなら、現在主流の第四紀洪積世説を覆す大発見となる、だから樺ノ木大学士は依頼を受けた、という分析が可能となる。むろん、「第三紀」から「人類」の化石を発見できる可能性は、「極上等のオパール」を発見するのと同様限りなくゼロパーセントに近いことを作者は十分承知しているのであるが、第三紀人類起源説と響きあうことにより、作品が単なる荒唐無稽な筋立てで終わらない仕掛けとなり、そこにユーモアが生まれるのである。それから、もう一点、宮城や小野のとする「第三紀の人類」に関する進化論的な見地からの考察に疑問を投げかけておきたい。というのも、賢治の場合、「人類」という語彙はかなり幅広く用いられており、常識的（科学的）な「人類」の解釈が通用しない例が、数多く見出せるからである。

たとえば、『春と修羅』第一集「序」にも「人類」の語が用いられているが、この「人類」を（ピテオドクス）と同じ手法で解釈することは不可能であろう。

— 略 —

おそらくこれから二千年もたつたころは
それ相当のちがつた地質学が流用され
相当した証拠もまた次次過去から現出し
みんなは二千年ぐらゐ前には
青ぞらいつばいの無色な孔雀が居たとおもひ
新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層
さらびやかな氷室素のあたりから
すてきな化石を発掘したり
あるいは白堊紀砂岩の層面に
透明な人類の巨大な足跡を
発見するかもしれません

賢治は、白亜紀に「人類」がいたと主張しているのである。ただし、その「人類」は「透明な人類」であり、「巨大な足跡」をもった「人類」である。通常われわれの考える「人類」と異なる存在であることは十

分予想されることだが、宮城や小野が主張する「第三紀」に存在したヒトやゴリラ、チンパンジーの共通の祖先としての〈ピテオドクス〉を、賢治が、「人類」として認識していた可能性はないと思う。おそらく賢治は、地質学的時間を貫いて存在する「人類」というものを想定しているのである。

賢治が『法華経』に深く帰依していたことはよく知られた事実だが、その前提に立つなら、釈迦は今生で悟りを得たのではなく、実は五百塵点劫という久遠の過去世において既に成仏していた存在ということになる。これが〈久遠実成〉と呼ばれる法華経を支える史観である。当然このような史観は明治以降科学の根本を支えてきた進化論と対立する。しかし、科学者の側面をもつ賢治は進化論を受け入れていることも事実であり、その点の解釈が複雑となる。

例えば、「銀河鉄道の夜」に天の川の岸で化石を発掘している学者に出会ったが、その学者は「ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ」と述べており、明らかに進化論者である。また詩「胸はいま」(「疾中」篇)にも、進化論に基づく知識が

見て取れる。

胸はいま

熱くかなしい鹹湖であつて

岸にはじつに二百里の

まっ黒な鱗木類の林がつづく

そしていったいわたくしは

爬虫がどれか鳥の形にかはるまで

じつとうごかず

寝てゐなければならぬのか

この詩を理論的に支えているのは、鳥類は爬虫類から進化したという進化論的知見である。詩中の「鱗木」とは主に古生代・石炭紀に栄えたシダ植物である。爬虫類は石炭紀に誕生したと考えられており、この詩の場合賢治は初期の爬虫類をイメージしていたかもしれない。一方、鳥類の直接の祖先は恐竜類であり、その点を重視した場合は、恐竜類が発生、進化を遂げた中生代(三畳紀からジュラ紀、白亜紀にかけて)を想定していたと解釈することも可能だと思う。どちらに

しろ、人間の寿命を遙かに超えた億年という地質学的単位が基本となったこの詩は、賢治の思想の特徴をよく示しているといえるだろう。

このように賢治は、進化論に精通し、またそれを科学的事実として認めていたにもかかわらず、地質学的時間を貫いて存在する「人類」というものを考えずにはいらなかったのである。それはなぜだろうか。

一〇七四 「青ぞらのはてのはて」

青ぞらのはてのはて

水素さへあまりに稀薄な気圏の上に

「わたくしは世界一切である

世界は移ろふ青い夢の影である」

などこのやうなことすらも

あまりに重くて考へられぬ

永久で透明な生物の群が棲む

（「詩ノート」）

ここでは「人類」語を用いず「永久で透明な生物の群」と表しているが、それは、この詩が仏教的世界観

に忠実に書かれているためであるからだ。おそらく、「永久で透明な生物の群」とは、輪廻から解放された菩薩か仏のような存在である。ときに賢治には、進化論を超えたところで起動する仏教的思想といったものがあると、われわれは心の準備をしておくべきだろう。

「小岩井農場」パート九（『春と修羅』第一集）は、「永久で透明な生物の群」を現在時・現在空間で表現しようとした例である。

すきとほつてゆれてゐるのは

さつきの剽悍な四本のさくら

わたくしはそれを知つてゐるけれども

眼にははつきり見てゐない

たしかにわたくしの感官の外で

つめたい雨がそそいでゐる

（天の微光にさだめなく

うかべる石をわがふめば

おゝユリア しづくはいとど降りまさり

カシオペーアはめぐり行く）

ユリアがわたくしの左を行く
大きな紺いろの瞳をりんと張つて

ユリアがわたくしの左を行く

ペムベルがわたくしの右にある

………はさつき横へ外れた

あのから松の列のどこから横へ外れた

(幻想が向ふから迫つてくるときは

もうにんげんの壊れるときだ)

わたくしははつきり眼をあいてあるいてゐるの
だ

ユリア ペムベル わたくしの遠いともだちよ

わたくしはずあぶんしばらくぶりで

きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た

どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを

白聖系の頁岩の古い海岸にもとめただらう

(あんまりひどい幻想だ)

わたくしはなにをびくびくしてゐるのだ

どうしてもどうしてもさびしくてたまらないと

きは

ひとはみんなきつと斯ういふことになる

きみたちとけふあふことができたので

わたくしはこの巨きな旅のなかの一つづりから

血みどろになつて遁げなくともいいのです

「(幻想が向ふから迫つてくるときは／もうにんげんの壊れるときだ)」という独白がなんとわれわれの心を強く捉えることであらうか。賢治が「幻想」に与えた名前は、「ユリア」と「ペムベル」という童話の登場人物のような名前である。「ユリア ペムベル わたくしの遠いともだちよ／わたくしはずあぶんしばらくぶりで／きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た／どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを／白聖系の頁岩の古い海岸にもとめただらう」。

「ユリア」、「ペムベル」の特徴は、「巨きなまつ白なすあし」である。この存在は、童話「光の素足」に登場する「釈迦仏」の特徴を示す「大きくまつ白なすあし」とびたりと重なっていく。

そして賢治は、「どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを／白聖系の頁岩の古い海岸にもとめただらう」とも記しているのである。これは「序詩」で記

した「あるいは白堊紀砂岩の層面に／透明な人類の巨大な足跡を／発見するかもしれない」と響きあっていることはいまでもない。「ユリア」「ペムペル」は、地質学的時間を貫いて存在する「人類」なのでもある。

小野隆祥は、この「ユリア」「ペムペル」に関し、次のような解釈を与えている。「賢治の地質学への関心と知見とを前提してはじめて、私たちは「小岩井農場」のモチーフと幻覚の意義とを把握できる」と確認したうえで、

「小岩井農場」パート五に、その日「牛は出てゐない」と明記している。したがってパート九の幻想の子らユリア、ペムペルおよび異稿に出てくるツイーゲルについての従来の解釈は首肯できない。ユリアやペムペルは農場の牛に仏教的な「素足の生物」を連想して与えた名であるというのは全く当推量であろう。私はユリアは侏羅系をドイツ語訓みしたユラーから命名したのであるうし、ペムペルは古生代の石炭紀に続くペルム紀

から由来した名であろうと考える。

二疊紀は *Dyas* と呼ばれるほか *Perm* とも呼ばれる。七七年春、ソ連科学アカデミー恐竜展に、二疊紀の哺乳類・爬虫類の化石が多数出品されたのでもわかるが、二疊紀はロシアに縁が深く、ペルムはロシアの王朝の名に由来する。このペルム系（二疊系）の岩層は早池峯山以北の岩手県北全体を蔽うており、以南でも内陸・沿岸の大半を蔽うている。この系以前の岩層と以後のすべての系統とを合算してもペルム系の面積にはるかに及ばない（小貫義男による）。そしてこの岩手県のペルム系について一九一〇年代にある程度古生物学的発見や説明がなされていた。要するに、ペルム系を知らずに岩手の地質を語ることは、賢治の時代にもできないことであつた。「白堊系の頁岩の古い海岸」に遠い友だちを求めた賢治の心情は、当然に地質系統の名をその幻覚の友だちに与えたというべきである。

小野の解釈をどれほど確かなものと判断してよい

か分からないが、「ユリア」「ペムペル」の命名が、ジュラ紀やペルム紀といった地質学的語彙からの連想であるという視点は、説得力があるように思われる。「きみたちとけふあふことができたので／わたくしはこの巨きな旅のなかの一つづりから／血みどろになつて遁げなくてもいいのです」と賢治がいう時、進化論の及ばない菩薩や仏との出会いこそが、切実な問題だったのである。

次に挙げる詩にも、幻想の「白びかりの巨きなすあし」の存在が描かれている。

手 簡

雨がぼしやぼしや降つてゐます。

心象の明滅をきれぎれに降る透明な雨です。

ぬれるのはすぎなやすいば、

ひのきの髪は延び過ぎました。

私の胸腔は暗くて熱く

もう醗酵をはじめたんぢやないかと思ひます。

雨にぬれた緑のどてのこつちを
ゴム引きの青泥いろのマントが
ゆつくりゆつくり行くといふのは
実にこれはつらいことなのです。

あなたは今どこに居られますか。
早くも私の右のこの黄ばんだ陰の空間に
まっすぐに立つてゐられますか。
雨も一層すきとほつて強くなりましたし。

誰か子供が囁んでゐるものではありませんか。
向ふではあの男が咽喉をぶつぶつ鳴らします。

いま私は廊下へ出ようと思ひます。

どうか十ぺんだけ一緒に往来して下さい。

その白びかりの巨きなすあしで

あすこのつめたい板を

私と一緒にふんで下さい。

(『春と修羅』補遺)

「どうか十ぺんだけ一緒に往来して下さい。／その白びかりの巨きなすあしで／あすこのつめたい板を／私と一緒にふんで下さい」と哀願する賢治の姿は、地質学的時間を貫いて存在する菩薩・仏への絶対的帰依に基づいている。ただし、賢治は、自分の見ているもの、感じているものが、「幻想」であるという、客観的認識を保ち続けている点が重要である。「幻想」への依存と「幻想」からの自立、この拮抗が詩人賢治の根幹といえるだろう。

三、白亜系の頁岩

賢治が「透明な人類」の足跡を、「白堊系の頁岩の古い海岸」にもとめたことに、どのような意図を読み取ればよいのだろうか。「昔の足あと」といつていることから、化石としての足跡であると判断でき、「透明な人類」は、白亜紀から現在まで時間を貫いて存在し続けているわけである。というのも、賢治が「ユリア」「ペムペル」の「幻想」の二人に出会っているの

は、岩手山麓（小岩井農場）であり、岩手山の成立は新生代・第四紀であり、地質学的時間からいえばかなり「現在」に近い。これを逆に考えれば、「現代」に近い新生代・第四紀に存在している「ユリア」「ペムペル」が、中生代・白亜紀にも存在していたことの証拠を求めようとしていたということになる。

さらにこの視点から述べるなら、序詩での「あるいは白堊紀砂岩の層面に／透明な人類の巨大な足跡を／発見するかもしれません」という主張は、過去の事実としての証明ではなく、白亜紀から現在まで続く「透明な人類」の証明なのである。むしろ理屈を言えなくはならないのだが、賢治は、どのような理由があつてか、白亜紀という地質年代にこだわりをもっている。

小野の文章から引き続き引用する。

岩手県の白亜系の研究はすでに一九〇〇年に八重樫七兵衛が、宮古市の崎山日出島付近で化石を発見したことから始まった。同一三年に矢部・

江原共同報文「宮古の白堊系層位」（英文）が、東北大学地質学紀要第二集として出されたから、賢治は高農入学後、これを読むか、講義で聴くことは可能であった。

この報文では白堊系は宮古層群と呼ばれ、田野畑砂質頁岩が一つの模式的意味を持つとされた。これは地表下百米に七十米の厚みをもつて走るが、概ね下部白堊系とみなされた（以上は小貫義男博士による）。

白堊系は内陸部では遠野市六角牛までの大船渡層群しかない。賢治は大正六年七月に、高農三年生で陸中海岸旅行をしたが、当時の歌稿には釜石・山田・宮古（浄土が浜）の地名がなく、地質や洞窟への言及は見られない。しかし崎山と浄土が浜は近いので、白堊系岩層を見たかどうかは肯否ともに断定できない。

後にこの白堊系「宮古層群」から、恐竜の上腕骨一部（雷竜の仲間と推定されている）が発見されている。それは昭五三年のことであり、発見された岩和泉町の

茂師の地名から「モシリユウ」と呼ばれる。賢治は恐竜の骨の発見を、実際の発見の五〇年以上前に想像し、「樺ノ木大学士の野宿」を書いたのである。その点とはかくとして、重要なのは、「透明な人類」が恐竜の時代にも存在してほしいという、賢治の思いの深さである。

賢治は実際に白亜紀砂岩に「透明な人類」の足跡を探しに行ったのだろうか。見つかるはずのない「足跡」探しではあるが、まったくの思想的レトリックといえない面がある。樺ノ木大学士が野宿した洞窟であるが、細田嘉吉の調査により、問題の宮古市の日出島付近で、それらしきものを発見しているのである。当然そこは白亜紀の地層であり、賢治が実際、中生代・白亜紀砂岩の上に立った可能性を物語っている。細田嘉吉が平成一〇年秋の宮沢賢治学会で口頭発表した資料の一部を次に紹介する。

「……どうだ、この頁岩の陰気なこと。全くいやになちまふな。おまけに海も暗くなつたし、なかなか流紋玻璃にも出っ会はさな

い。……」

—— 中略 ——

もう夕方の鼠いろの

頁岩の波に洗はれる

海岸を大股に歩いてゐた。

—— 中略 ——

しばらく黒い海面と

向ふに浮かぶ腐った馬齡薯のやうな雲を

眺めてゐたが、又ボケツトから

煙草を出して火をつけた。

それからくるつと振り向いて

陸の方をちつと見定めて

急いでそっちへ歩いて行つた。

そこには低い崖があり

崖の脚には多分は溝で

削られたらしい小さな洞があつたのだ。

これは樺ノ木大学上の第三夜の一節であるが、
本当に日出島海岸の描写そのものではないか。

東落ちに海に入る陰気な頁岩層は、宮古層群の

象徴的存在であつて今も変わらないが、今の日出島海岸は、漁港と駐車場が整備され昔のおもかげはない。それでも、対岸の日出島そのものと、此岸の崖下に穿たれた洞穴は、写真にみるように、やはり昔と変わっていない。

細田の調査・論考を知つたのは、平成一〇年秋の宮沢賢治学会・口頭発表会でのことであつた。細田の発表は「樺ノ木大学士の野宿」全体にわたるもので、本稿ではその一部のみ参照させていたとどまっているが、未見の方は、遺稿集『石で読み解く宮沢賢治』（鈴木健司・照井一明編、平20・5）をご覧いただきたい。

私は、細田の提示した洞窟の写真を見て、賢治がその洞窟の存在を知っていた可能性の大きさを直感した。岩手の内陸に生まれ育つた賢治が、何のモデルもなく海際にある白亜紀の洞窟を想像できるとは考えにくいことだからである。すでに、小野や細田の指摘していることだが、岩手県における宮古層群（中生代白亜紀層）の本格的な研究は、大正二年に発表された、

矢部・江原 (Yabe, H. and Yehara, S.) の "The Cretaceous Deposits of MIYAKO" (Science reports of the Tohoku Imperial University. 2nd series, Geology.) を嚆矢とする。小野や細田は賢治はその論文を読んでいたのではないかと推定しており、私も同様に考えている。その論文には洞窟の存在を示すような箇所はなく、それだけに細田が日出島で発見した洞窟は、賢治自身日出島に行ったことがあるはずだという確信を、細田に抱かせているようである。

ただ、細田論を有効な仮説と認めるためには、大きな問題点が残されている。賢治はいつ日出島に行ったのかという点の検証である。作品の成立を大正一二年ころとすると、年譜上、賢治が宮古方面にいった可能性は一度しかない。『新校本宮沢賢治全集』第16巻年譜篇、平13・12) の大正六年七月の項に次のように記されている。

七月二五日(水)「東海岸視察団」に加わり午前八時三九分鳥谷ヶ崎駅出発。「東海岸視察団」は軽便鉄道の敷設により花巻―釜石間が結ば

れた(仙人峠は徒歩)ため、東海岸の産業状態を視察しようという実業家有志三六名の団体で、団長三鬼鑑太郎、宮沢一族の直治・右八・弥吉・賢治、親戚の梅津善次郎・平賀円治・瀬川弥右衛門、その他「町内の上流・粒揃い」の一行。夕刻釜石到着、捕鯨会社(大東漁業株式会社)を見学。一泊。

七月二六日(木)船で大槌港、山田町を経て、宮古町泊り。一行は熊安・沢田・山田の三旅館に分宿。賢治はいつたん沢田屋旅館に旅装を解くが、ななめ向かいの岡田屋(中学四年のとき寄宿舎で同室だった一年下の岡田与志松の家)に移動して一泊。

七月二七日(金)朝父あて葉書(書簡34)で、前日の夕方宮古着を知らせ、本日午後または明日より小国を経て三〇日夜迄には帰る予定を報じる。

一行は岡田製糸工場・県立水産学校・昆布工場・宮古公会堂・宮古測候所を視察し、水産学校の「岩手丸」により浄土ヶ浜に一遊、それよ

り鉄ヶ崎に出、宴会後夜一時発の船で大槌・釜石へ向かっている。

賢治は一行と別れて岡田与志松の案内で佐原を通って浄土ヶ浜に向かう。岡田は都合で浄土ヶ浜に寄らずに帰宅したが、賢治に浄土ヶ浜の短歌（書簡35）があるので、山上から浜を見下しただけで岡田とともに戻ったか、あるいは独りで浜まで行ったのであろうか。

七月二十九日（日）「陸中団小国峠麓ニテとして帰省中の保阪あて葉書（消印后 0-3）を出している（書簡35「消印による推定」）ので、午前中に小国まで到着したことが判るが、前日の行程は分明でない。このあと四〇キロ余の山谷をつかれはてながら遠野へ出たことが短歌（「歌稿[B]」565〜573a574）でしられる。が、花巻帰着は二十九日夜か三〇日かは不明である。視察団右はこの日夕刻花巻着、五日間の日程を終っている。

『新校本宮沢賢治全集』第16巻（年譜篇）の年譜（以

下、〈新年譜〉と略す）は、旧来の年譜（以下、〈旧年譜〉と略す）『校本宮沢賢治全集』第14巻（昭52年・10）と若干の異なりを見せている。それは、山根英郎の調査により、七月二十六日から二七日にかけての賢治消息に関する資料が発掘されたことによる。山根は、賢治の一級後輩にあたる岡田与志松の存在を知り、氏から次のような書簡を受け取っている。以下は、山根が、宮沢賢治学会イーハトーブセンター「会報」第17号（平10・9）に投稿した「賢治と寂光ヶ浜」と題するエッセイで紹介した、岡田与志松の山根英郎宛ての返信である。

拝啓

お問い合わせの宮沢賢治氏の事についてははつきりとは覚えておりません。そのわずかに覚えている事についても、確かであるとは言いい切れません。次に覚えている事をそのまゝ申し述べます。私は賢治氏とは同級ではありません。彼は私より一年上でした。私が中三の時彼は中四で盛中の寄宿舎で同室の三号室でした。

彼はこの年の夏休みのはじめ七月下旬に宮古に来て独りで沢田屋旅館に旅装を解かれました。

そのときの私の家は沢田屋の斜め向かいにあつて、連絡をうけたので沢田屋に参上、面談の上私の家に泊つて貰うことにしました。私の家での接待は長兄の妻ツヨ姉がして呉れました。その晩どんな事をして、どんな事を話したかなどは奇妙に少しも覚えておりません。

翌朝私は彼を案内して佐原を通つて浄土が浜に向かいました。

彼は手にピッケルを携えていて、足下の小石をたゞいたり、荒肌をあらわしている岩を砕いたりしていました。私は別に質問するでなし、たゞぼんやりとそれを見ていました。

彼はまた道を歩き乍ら法華経について私に話しかけました。にも拘わらず私が無感動だったので失望した様子でした。

山の一角にある墓地から蛸の浜を遠望し、それから何かの都合で浄土が浜に出るのを止め急いで家に帰りましたが、そのときバスに乗ったかど

うか記憶してありません。

その後の動静は全然記憶にありません。

右の通りです。

《新年譜》は、《旧年譜》を一步前に進ませたことは事実であるが、或る意味、あらたな謎を作ってしまったともいえないかもしれない。《新年譜》には、「賢治は一行と別れて岡田与志松の案内で佐原を通つて浄土ヶ浜に向かう。岡田は都合で浄土ヶ浜に寄らずに帰宅したが、賢治に浄土ヶ浜の短歌（書簡35）があるので、山上から浜を見下しただけで岡田とともに戻つたか、あるいは独りで浜まで行つたのであるのか」という、あいまな表現をせざるをえない年譜作成者の苦しい事情が見え隠れしている。岡田与志松の記憶では、賢治を浄土ヶ浜に案内するつもりでいたのだが、佐原（宮古の町の北部）あたりで引き返してしまつたという。しかし、賢治には、浄土ヶ浜を歌つた短歌が数種残されており、浄土ヶ浜に行つたことは事実として動かない。そこで年譜作成者は、断定を避け両方の可能性を記述することにしたのだろう。

年譜としては〈新年譜〉のような記述が公平で望ましいことである。その上で、作品研究の場合、年譜からさらに奥に踏み込んでいかなければならない場合がある。賢治が日出島に行ったかどうかという問題は、「樺ノ木大学士の野宿」の成立を考察する上で、とても重要な点だからである。

〈新年譜〉（旧年譜）ともに、七月二十九日（日）の項に「前日の行程は分明でない」と記されている。先の小野は「当時の歌稿には、釜石・山田・宮古（浄土ヶ浜）の地名がなく、地質や洞窟への言及は見られない。しかし、崎山（日出島―注・鈴木）と浄土ヶ浜は近いので、白亜系岩層を見たかどうか肯否ともに断定できない」としている。当時の年譜・資料からすれば、妥当な判断だと思われる。

一方、細田は、〈旧年譜〉にのっとり、空白の二八日に日出島に行った可能性の高さを主張することになる。以下に主要部分を引用する。

賢治は、書簡等で知られている限りでは、釜石、宮古方面へ二回旅行している。いずれの時にも

「樺ノ木大学士の野宿」第三夜を構想したという明確な証拠はないが、賢治の思想的営為をたぐる一助として上げておく。

一回目は、大正六年七月二十五日から三十日まで、高等農林学校三年北海道見学旅行に参加せず、花巻町有志による東海岸視察団に加わったのであった。一行の行程は次のとおりであった。

二十五日 八時三〇分軽便鉄道鳥谷ヶ崎駅発、釜石泊り

二十六日 船で大槌港、山田町を経て、宮古泊り

二十七日 浄土ヶ浜、欽ヶ崎等を回り一行は夜十一時の船で大槌、釜石へ。賢治は一行と別れている。この日、宮古から父宛はがきを出している。（書簡34）

拝啓 昨夕当地着仕り候、小生は本日午后又明日より小国を経て三十日夜道に帰り申す予定に御座候 一日遅れ候も充分の視察致したく存じ居り候 一同无事 先づは 草々

二十八日の賢治の行動ははっきりしていない。二十九日午前には、小国峠麓から保坂嘉内宛にがき（書簡35）を出している。内容は数首の短歌であるが、その中の一首。

うるはしの海のビロード 昆布らは寂光のはまに敷かれひかりぬ。
（浄土ヶ浜）

これで、浄土ヶ浜は夜であつたことがわかる。その夜（二十七日）は宮古泊であろう。

翌二十八日の行程は分明ではないが、熱心な地学学徒賢治のことである、この一日を白亜紀系宮古層群の視察に当てたものと考えたい。父に宛てたはがきにある「一日遅れ候も充分の視察致したく存じ居り候」とはこのことではなからうか。すくなくとも、浄土ヶ浜からほど近い日出島にだけは足を伸ばしたのと考えたい。

細田説の難点は、賢治の日出島行きが二八日に限ら

れてしまっている点にある。翌日の午前中に賢治は四〇キロ以上離れた「小国峠麓」にいたことが保坂宛書簡から分かっている。「小国峠麓」付近での宿泊だったとすれば、前日（二八日）の夕刻までに「小国峠麓」に着かなければならない。また、昼夜を徹しての旅で、翌日朝「小国峠麓」に着いたとしても、かなりの強行スケジュールである。なぜなら、二七日を宮古泊と仮定した場合、日出島までの往復約六キロと現地での滞在時間を考慮に加え、それから帰路となると、宮古を発つ時間は昼すぎにならざるを得ず、それから小国峠に向かつて起伏に富む陸中の山道を歩いたとしたなら、賢治は飛ぶようにして歩いたことになる。この強行スケジュールに基づく推定は、やはり説得力を欠くのではないだろうか。

〈旧年譜〉発刊の後に見出された山根英郎による岡田与志松の証言は、細田説を補強する有力な資料となるように思う。というのも、賢治の日出島行きを、二七日午後と想定することが可能となるからである。つまり、年譜上の空白は、二八日の一日だけでなく、二七日午後から二八日という、一日半の空白が生じる可

能性があるのである。

その点を確実にするためには、賢治は浄土ヶ浜にいつ行ったかを考察しておかなければならない。細田説によれば、賢治の浄土ヶ浜行きを夜と確信しているようであるが、果たしてそれでよいのか、という問題である。細田が引用した「うるはしの海のビロード昆布らは寂光のはまに敷かれひかりぬ」は、確かに夜景を思わせるが、「歌稿（B）」に残された、他の浄土ヶ浜を詠んだ歌の中には、朝または日中の光景を思わせるもの含まれているのである。

寂光のあしたの海の

岩しろく

ころもをぬげばわが身も淨し。

雲よどむ

白き岩礁

砂の原

はるかに敷ける褐のびらうど。

寂光の

浜のましろき巖にして

ひとりひとで見つめたるひと。

「寂光のあしたの海」を、夜の景色と読むことはできないだろう。《新年譜》の作成者が「岡田は都合で浄土ヶ浜に寄らずに帰宅したが、賢治に浄土ヶ浜の短歌（書簡35）があるので、山上から浜を見下しただけで岡田とともに戻ったか、あるいは独りで浜まで行ったのであろうか」と記した背景にも、浄土ヶ浜の短歌には朝または日中に詠われたものを含むという解釈があつてのことだろう。

さてここから、賢治の宮古での行動に関する私の解釈を述べたい。賢治は日出島に行ったであろうという細田説を受け、どのように賢治が行動したと仮定すれば日出島行きが可能となるか、考えていく。

賢治の宮古での沢田旅館泊まりは、最初から予定されていたのではないだろうか。岡田与志松の証言に、「独りで沢田屋旅館に旅装を解かれました」と記されていることから、単独の宿泊であつたことが確認で

きる。また、保阪宛書簡の短歌にも。「蕩児らと宮古にきたり夜のそらのいとふかみに友をおもへり。(こゝにて群をはなる)。「群」とは視察団の一行を指しているの、やはり、当初から、宮古に着いた時点で視察団の一行と別行動をとる予定になっていたのだと推定したい。また、沢田屋旅館へ宿泊予定者が賢治一人であったということは、宮古から別行動をとりたいという賢治の意向を視察団としても了解していたと考えてよい。

本来、宮沢家としては当主政次郎が参加すべき視察であったのではないか。それが、長男とはいえ未だ学生身分の賢治が参加したのはなぜか。しかも、盛岡高等農林の北海道見学旅行を断つてまでの参加である。賢治が参加した経緯は未詳だが、賢治自身にとつて宮古に行きたい個人的な理由があり、父の代理を務めた、という推定も可能だろう。

岡田与志松の記憶をほぼ正確なものとするなら、賢治は、岡田と別れた後、そのまま日出島に向かった可能性が考えられる。佐原からならば、日出島は山道(現在の国道259号線を通つたと推定できる)で約四キロの

距離である。二七日の午後日出島にいたという推定の根拠は、浄土ヶ浜を詠った短歌の内容にある。賢治の短歌には、浄土が浜の朝の情景と夜の情景が含まれている。歌稿での順番は、夜・朝夕互になつており多少の疑問は残るが、二七日、賢治は岡田と別れてから日出島に向かい十分時間をかけて滞在し、夕刻または夜に浄土ヶ浜にもどつたのではないか。そしてそのまま朝まで浄土ヶ浜にいたという推定である。このように考えれば、二八日は午前中から帰路につくことができ、二九日午前中に「小国峠麓」にいても無理なことではない。

浄土ヶ浜は、新生代・第三紀に、中生代の地層を突き破つて地表に現れた流紋岩の岩脈である。海の浸食を受けた奇岩が立ち並ぶことから観光地として知られているが、中生代白亜紀砂岩に「透明の人類」の足跡を求める賢治にとつて、また、中生代白亜紀に紛れ込み雷竜に襲われる植ノ木大学士にとつて、日出島から浄土ヶ浜への移動が、単なる地理的移動でなく、宗教的意味あいを併せ持っていたのではないかと推定される。「寂光のあしたの海の／岩しろく／ころもを

ぬげばわが身も淨し」。賢治にとつての中生代という修羅意識は、寂光土に立つことにより浄められるのである。岡田与志松の証言にあった「彼は手にピックルを携えていて、足下の小石をたゞいたり、荒肌をあらわしている岩を砕いたりしていました」とは地学者の賢治であるが、「彼はまた道を歩き乍ら法華経について私に話しかけ」たのは宗教者としての賢治である。賢治にとつて、日出島と浄土ヶ浜とは修羅と寂光土という対応関係になっていたと思われる。

四、日出島の洞窟（調査結果）

以下は、日出島で調査したことの結果の報告である。幸い、細田のいう洞窟を見出すことができ、私なりに調査することもできたので、写真（2・3・4）を提示するとともに、考察を加えてみたいと思う。

洞窟は、日出島海岸の岬の崖下にある（写真3参照）、波打ち際までコンクリートで固められてはいるが、海の中に日出島が浮かぶ光景となる。作中の表現「それからくるつと振り向いて／陸の方をちつと見定めて

／急いでそっちへ歩いて行つた。／そこには低い崖があり／崖の脚には多分は涛で／削られたらしい小さな洞があつたのだ」に、かなり重なっているように思う。また、崖をなす岬は、作中、樺ノ木大学士が這い登ろうとした「岬」の原風景となっているかもしれない。その崖が実際に中生代・白亜紀のものなのか、確認しておきたい。

私が主に用いた文献は、すでに挙げた、大正二年に発表された、矢部・江原（Yabe, H and Yehara, S.）の“The Cretaceous Deposits of MIYAKO”（Science report of the Tohoku Imperial University. 2nd series, Geology, 1913）と、昭和四三年に発表された、花井・小畠・速水の「白亜系宮古層群概報（「国立科博専報」No. 1 1968・3）、昭和四五年に発表された、島津・田中・吉田の「田老地域の地質」（地域地質研究報告、秋田（6）第18号、工業技術院地質調査所、1970）の三種である。

A）岩手県における白亜紀層の位置

図4は、岩手県にみられる白亜紀層を表しており、

Cretaceousと説明のある黒く塗りつぶされた箇所で、三陸海岸線上に点々と存在している。図4は矢部・江原論文文中のもので、賢治は、岩手県内に白亜紀層がいに少ないか熟知していたと思われる。日出島は、地区名を表す日出島と、六百メートルほどの沖合に浮かぶ日出島の二つあるが、本稿で問題としている日出島は地区名を表す日出島で、以下、日出島海岸と呼ぶことにする。

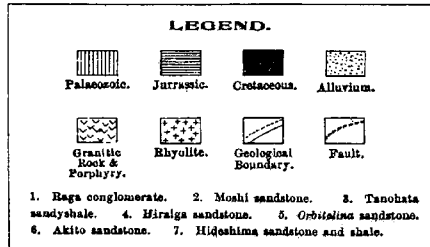
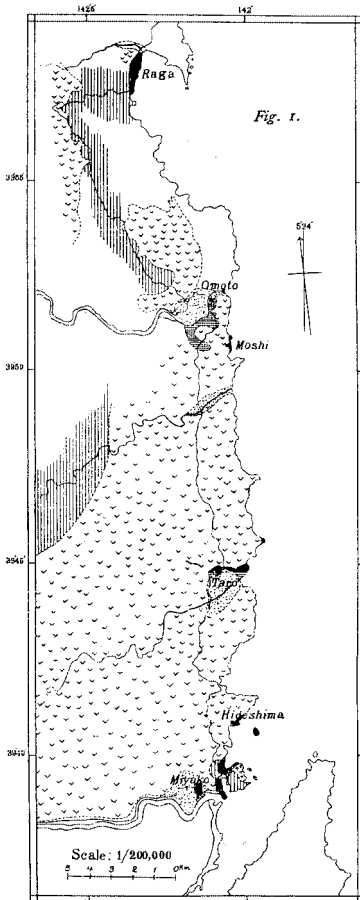


図 4

B) 日出島の位置と白亜紀層

図5は同じ矢部・江原論文からだが、日出島を拡大した図である。この図からでは地形がよく分からないので、大正5年測図の五万分の一の地図（大日本帝国陸地測量部）を見てみたが、やはり細部は判然としておらず、参考にならないことが分かった。現在の日出島海岸は、一面コンクリートで護岸されており、浜が砂岩だったのか頁岩だったのか区別をつけることができない。賢治は中生代・白亜紀に関し、砂岩とも頁岩とも記しており、コンクリートの下にある浜を見られないことは残念である。

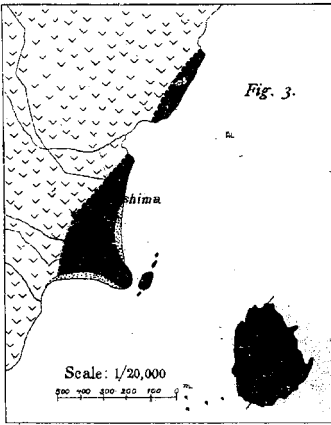


図5

図6（矢部・江原論文）を見るかぎり、浜は、中生代・白亜紀層から成っていることが分かる。この図の解説を次に挙げる。

The coast of Hideshima as seen from the northwest. The cross-bedded Moshi sandstone (2) and Hiraiga sandstone (4) appear to lie below the Hideshima sandstone and shale (7). Of which the islet of the same name is built up. A conglomerate bed (○○) and intrusive sheets of rhyolite (+ +), in the Hideshima sandstone and shale group, are purposely marked distinct on the picture.

図6の崖の箇所が、斜層理状の茂師砂岩と平井賀砂岩から成っていることを指摘しており、おそらく海岸は茂師砂岩か平井賀砂岩のどちらかが露出していたと推定される。つまり、地質的には砂岩であり、頁岩でないということが判断できる。砂岩がsandstoneであるのに対し、頁岩はshaleで矢部・江原論文にしたがうかぎり、頁岩は、海の沖に浮かぶ日出島（日出島層）で観察されるのみである。

Fig. 1.

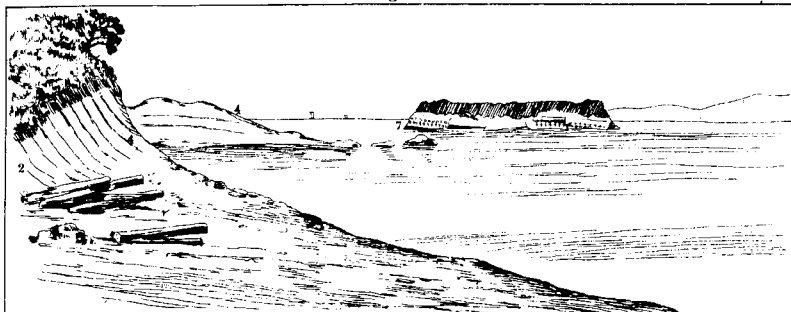


図 6

層序区分		田 老 図 幅 地 域									
		岩泉肥域 茂師北方	茂師	大島	茂師 南東海岸	真崎	田老内陸	田老海岸	日出島 海岸	日出島	
宮古群層	日出島層										
	(層序関係不明)										
	明戸層										
	崎山層										
	平井賀層										
	上部										
	下部										
	田野畑層										
	上部										
	中部										
	下部										
	羅質層										
		陸中層群	陸中層群		陸中層群	陸中層群	田老 花崗岩	田老 花崗岩	陸中層群		

第20図 宮古群群島出地層の層序の範囲

図 7

C) 宮古層群の層構成

図7は島津・田中・吉田の「田老地域の地質」からの引用だが、中生代・白亜紀の宮古層群が、さらに、下部から羅賀層、田野畑層（下部・中部・上部）、平伊賀層（下部・上部）、崎山層、明戸層、日出島層に区別され、それぞれの地域でどのような現れ方をしているかを示している。日出島海岸の場合、羅賀層はなく、田野畑層（下部・中部・上部）と平伊賀層（下部・上部）、崎山層が見られ、さらに日出島層の現れていることが分かる。

宮古層群を成す地層をどのように区別し層序を決定するかなどは、研究者により異なりを見せる。島津・田中・吉田の「田老地域の地質」は、基本的に花井・小島・速水の「白亜系宮古層群概報」での記述を採用している。例えば、花井・小島・速水論文は、日出島海岸に関し、矢部・江原論文が羅賀層と判断した箇所を田野畑層の下部と位置づけし直している。

D) 地図上の日出島海岸

大正五年測図の五万分の一の地図は参考にならない

かったことはすでに述べたが（海岸までの道筋を知るためには大いに参考になる）、図8は、昭和四二年（「宮古」）、四三年（「田老」）測図の国土地理院二万五千分の一の地図である（日出島は「宮古」、「田老」両地図にまたがっている）。大正五年以降の測図としては昭和四二年、四三年の測図を待たなければならぬ。幸い二万五千分の一の地図も作成されており、比較的明瞭に日出島海岸の様子を知ることができる。入り江の北にコンクリート堤防の存在は見えるが、海岸自体はまだコンクリート化されていないようで、海岸線のようにすが窺える。さらに、入り江の南に岬のようなものがあることが確認できる。岬は一〇メートル程度の高さだが、その岬の南面の崖に洞窟が存在している。写真2の洞窟は岬の突端から南に下がったすぐのところにある。海岸線自体は大正のころとそれほど違っていないのではないだろうか。当時の海岸や岬の存在を考える資料になるだろう。

図9は、島津・田中・吉田の「田老地域の地質」からの引用である。昭和四五年の刊行であり、調査自体はその一、二年前であろうから、当時ならば、日出島

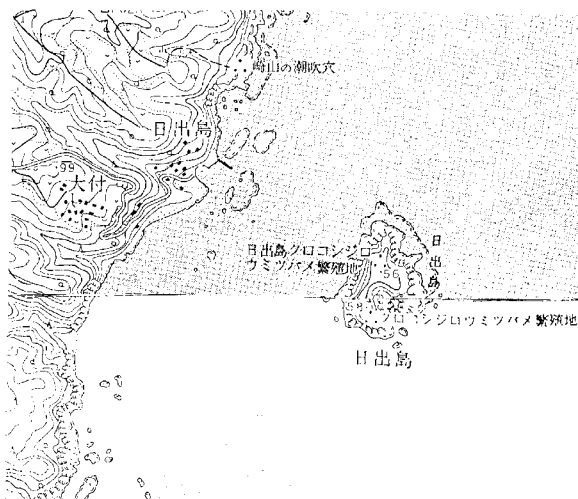
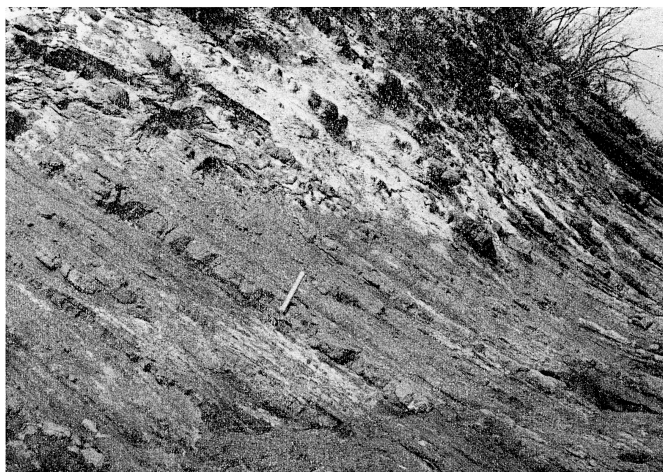


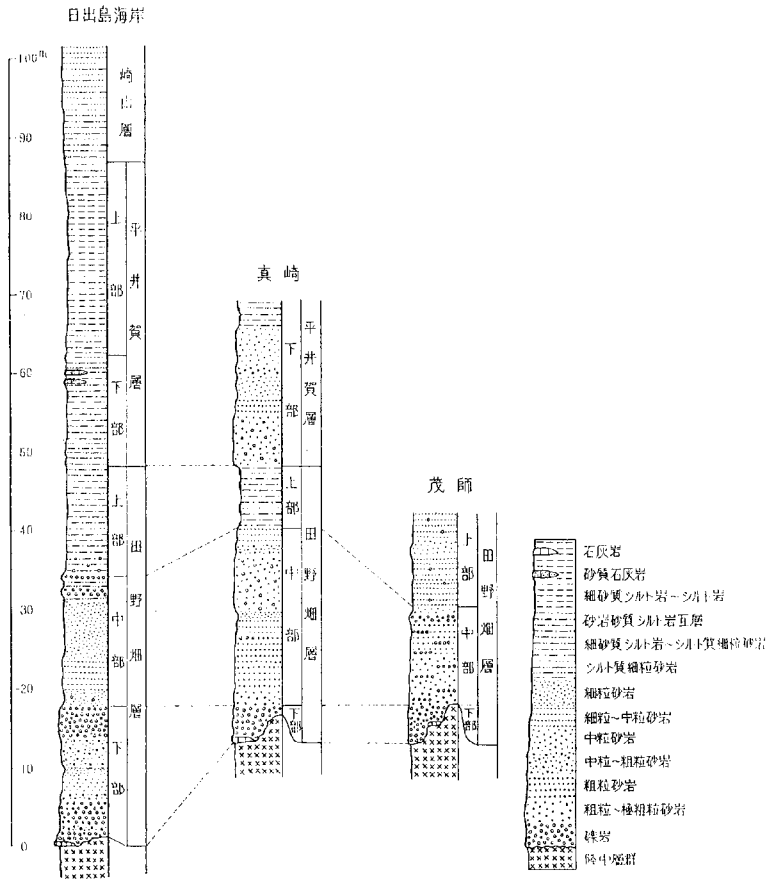
図8 国土地理院2万5千分の一地形図（昭和42～43年測図）

海岸の白亜紀地層を、手つかずの状態で観察できたことが分かる。



第26図 日出島海岸における宮古層群田野畑層上部（砂質シルト岩砂岩互層）の露頭

図 9



第21図 田老國幅地域宮古層群層序柱状図

図10

E) 洞窟の地学的分析

写真2は洞窟入り口、**写真3**は洞窟奥を、**写真4**は洞窟の内部側面を写したものである。

図9を見れば分かるように、宮古層群は地層が傾斜（海側に）しており、**写真4**においても、地層が入り口側（海側）に二〇数度傾斜していることが確認できる。**写真2**、**3**の洞窟底に白っぽく見える岩盤は厚さ一〇センチほどの砂岩であり、上部から落下したものと指定される。ちょうどベッドのようで、野宿するには都合がよさそうである。この砂岩には海百合の化石が含まれていた。地層はおそらくシルト岩と砂岩の互層で、シルト岩層のほうが厚く、また、風化のためかなり崩れやすくなっている。砂岩はかなりの硬さがある。

おそらく、この洞窟を成す地層は、シルト岩と砂岩との互層を特徴とする田野畑層上部か平井ヶ層下部と思われる（**図10** 島津・田中・吉田「田老地域の地質」参照）。洞窟入り口下部付近や岬の下部地層に貝化石が見られた。一つ一つは形を残してはおらず、貝殻が砕かれた状態で集積しており、化石の集積層とい

えるかもしれない。

また、厚さ数ミリ、巾数センチという単位のも、方解石（炭酸カルシウム）と思われる結晶体を数多く含む地層があった。無色透明でガラス光沢を有す。希塩酸に盛んに反応したことからも、組成は炭酸カルシウムであろう。また、まったくの砂質、シルト質でも希塩酸に盛んに反応した。おそらく宮古層群全体が石灰質の傾向をおびているものと推定される。試しに、高知県佐川で採取した中生代・白亜紀の砂岩に希塩酸を垂らしてみたが、何の反応も見られなかった。

五、「透明な人類の巨大な足跡」・「雷電の足跡」と日出国海岸の地質

賢治が視察団の一行からはなれ、一人日出島に行つたとしたら、その行動の内的根拠は、次のようなことであつたはずだ。それは、菩薩・仏といった輪廻を離れた存在が、大型爬虫類の跋扈する中生代・白亜紀にも存在していたを、足跡の化石を発見、確認することで、己の内面の修羅の救済をはかろうとした、という

ことである。

繰り返しの引用となるが、まとめとして重要なので
お許し願いたい。

どんなにわたくしはきみたち（ユリア、ペムベル
―注・鈴木）の昔の足あとを
白堊系の頁岩の古い海岸にもとめただらう

（「小岩井農場」パート九）

あるいは白堊紀砂岩の層面に
透明な人類の巨大な足跡を
発見するかもしれません

（『春と修羅』序）

もう夕方の鼠いろの
頁岩の波に洗はれる
海岸を大股に歩いてみた。

（「檣ノ木大学士の野宿」第三夜）

「白堊系の頁岩の古い海岸」にどれほど「昔の足あ
と」をもとめても、出会えるのは、大型爬虫類の足跡

だけである。その大型爬虫類（恐竜）ですら、昭和五
三年まで待たなければならなかった。「透明な人類の
巨大な足跡を／発見する」ためには、やはり「二千年」
（『春と修羅』序）待たなければならぬのである。
最後に、賢治が求めた白堊系の海岸がどのような岩
石であったか、調査した範囲での結論を述べておきた
い。

図10によれば、日出島海岸は田野畑層（下部・中
部・上部）、平伊賀層（下部・上部）、崎山層から成
るとされるが、問題は、海辺に露出していた地層はど
れかということである。

沖合に浮かぶ日出島は日出島層と呼ばれ、海岸には
露出していない。崎山層は、矢部・江原論文では平井
賀砂岩に含めている。おもにシルト質砂岩からなり、
化石をかなり含んでいる。日出島海岸では戎棚と呼ぶ
小島を構成し、上限は不明で少なくとも15 m以上の厚
さがある、とされる。写真6がその戎棚であり、崎山
層と名付けられたものである。平井賀層・上部は、日
出島海岸では、戎棚と海岸とのあいだの海食台を構成
しており、干潮時に海水面に露れる、とされる。した

がつて、層序上部から数えて、平井賀層・上部までは、現在海中もしくは沖に露われており、海岸を成す層ということはできない。層序下部から考えた場合、田野畑層・上部が、崖（岬）に露出しており、海側への傾斜を考えた場合、田野畑層・下部はまったく可能性はないと思われる。田野畑層・中部と上部のあいだに礫岩層のあることを図10は示しているが、写真7がその礫岩層かと思われる。コンクリートで固められた港の海岸の奥への突き当たりで確認できる。地層の海側への傾斜角度を考慮に入れると、この礫岩層を含め層序としてその上に当たると田野畑層・上部か、平井賀・下部が、海辺に露出していた地層ではないかと考える。その場合、シルト岩と砂岩の互層ということとなり、『春と修羅』序という「白堊紀砂岩の層面」は可能性が十分にあるといえるだろう。しかし、「白堊系の頁岩の古い海岸」の可能性は断たれると思う。ただし、賢治にはイギリス海岸をなす泥岩を頁岩と呼び換える例もあり、実際に見たままを表現に用いたという保証はない。

「植ノ木大学士の野宿」の場合、日出島の海岸がモ

デルであつたとしても、砂岩よりも、さらにきめが細かく硬質のイメージをもつ頁岩の方が、恐竜の足跡を表現するにはふさわしいといえるだろう。また、頁岩は泥岩が硬質化したものであるから、植ノ木大学士が中生代・白堊紀の時空間に入り込んだとき、頁岩が柔らかくなって泥にもどるという趣向は、砂岩では表現し得ないところである。賢治の物語作者の才能が、砂岩でなく頁岩を選ばせたのではないだろうか。

(了)



写真1 日出島付近の白亜紀層



写真2 洞窟入り口



写真3 洞窟深部



写真4 洞窟内部側面



写真5 洞窟のある岬



写真6 崎山層（正面左・海中の小山）



写真7 礫岩層